

『枕草子』に見える「和」と「漢」

——「九月二十日あまりのほど」章段を中心に——

張 培 華

要 旨 三卷本『枕草子』にしか見えない「九月二十日あまりのほど」の段は、従来の研究ではあまり注目されてこなかったものである。この段の内容を改めて考えみると、いくつかの問題点を挙げることができる。例えば、「九月二十日」はいつの年なのか。仮名文学において「窓」の用例はすくないが、ここで「月の窓より洩り」の「窓」はどのような意味で現れているのだろうか。段末には「人歌よむかし」において「人」はどのような人を想定していたのだろうか、さらにどのような「歌」であろうか。これらの問題点を考えてみたい。

はじめに

『枕草子』「九月二十日あまりのほど」の段は次のようにある。

九月二十日あまりのほど、初瀬に詣でて、いとはかなき家にとまりたりしに、いとくるしくて、ただ寝に寝入りぬ。

夜ふけて、月の窓より洩りたりしに、人の臥したりしどもが衣の上に、白うてうつりなどしたりしこそ、いみじうあはれとおほえしか。さやうなるをりぞ、人歌よむかし。

(二二二「九月二十日あまりのほど」(本文は新全集に拠る 以下同) 三五〇頁)

本段は三巻本にしか見えない。加藤盤斎『清少納言枕草紙抄』、北村季吟『枕草子春曙抄』、岡西惟中『枕草紙旁註』などで扱われることもなく、先行の研究でもあまり深くは考察が行われてこなかった。

ところが、九月二十日に初瀬(長谷寺)へ参り、疲れていた夜中、皎々と照る月に感興を催したことを記す、この記載を改めて考えみると、いくつかの問題点を挙げることができるだろう。例えば、傍線を付したところ、①「九月二十日」はいったいいつの年なのか。②仮名文学において「窓」の用例は少ないが、ここで「月の窓より洩り」と「窓」が現れているのはどういうことなのだろうか。そして、③「人歌よむかし」において「人」はどのような人を想定していたのだろうか。本稿では、これらの問題点を考えてみたい。

一 「九月二十日」はいつの「年」なのか

『枕草子』本文はその内容から三種の章段に分けられている。いわゆる類聚章段、随想章段、日記章段であるが、厳密に言えば、これらの三種の区分法では分別し難い段は多い。例えば、本段「九月二十日あまりのほど」も、その典型的な例であろう。記述の流れをつかむためにも、本段の前後の並び方を表にしてみよう。

三卷本	能因本	前田本	堺本
二二〇 賀茂へ詣る道に	二四八	なし	なし
二二一 八月つごもり、 太秦に詣つとて	二四九	なし	なし
二二二 九月二十日あまりのほど、 初瀬に詣でて	なし	なし	なし
二二三 清水などにまゐりて、	なし	なし	なし
二二四 五月の菖蒲の、	二〇六	二九七	一九八
二二五 よくたきしめた薫物の	二〇七	二九八	一九九
二二六 月のいと明かきに	二〇八	二六〇	一九七

右表に示したように、本章段は、四系統⁽¹⁾『枕草子』本文の中の、能因本、前田本、堺本いずれにも見えない。三巻本にある本章の前後の並び方を見てみると、いずれも当時の人気のあった寺を参詣した記事である。例えば、賀茂へ行く途中で見た田植えの風景、太秦（広隆寺）の途中で稻を刈る風情、初瀬（長谷）寺で粗末な家に宿泊した体験、清水寺の途中で柴を焚く印象を記したものである。このように賀茂、太秦、初瀬、清水などの名刹を主題に扱う視点に着目すれば、本章は「類聚章段」と考えられる。一方、これらの特定の寺に参詣した自分の体験を記載しているという点に注意するならば、本章は「日記章段」と言えなくもない。

では、文頭の「九月二十日」はどういう意図で記されたものなのだろうか。この点は、『枕草子』の古注を含む諸註では言及されてこなかった。⁽²⁾ ひとつのことかについては、極めて少数の研究者には考察が試みられはしたものの、その年次がはっきりと提示されることはなかったのである。⁽³⁾

ところが、『小右記』を検すると、長徳三（九九七）年、藤原道長が九月二十日に、「長谷寺」へ参詣した記事がある。この年次を候補に加えることはできないであろうか。確認のため、その記事を示す。

廿日壬午今曉左府被参長谷寺云々、一上布衣城外例、仰訪^(仰カ)前古所不聞也、事々軽忽、未知所比、

（廿日、壬午。今曉左府被参長谷寺に参らると云々。一上の布衣にて城の外なる例、そもそも前古を訪ふも聞かざる所なり。事々軽忽にして、未だ比ぶる所を知らず。）⁽⁴⁾

二十日の曉方、左大臣藤原道長が、長谷寺に参詣した。「一上（いちのかみ）の人」が「布衣」たる軽々しい服装で平安京を出たことを、前代未聞の軽率なふるまいと非難している。

この記事と『枕草子』本章とを照らし合わせてみると、興味深いことに、清少納言は道長と同日に京を出発した

可能性があることが指摘できる。

京から初瀬の、本段に記す「いとはかなき家」に到着するまでにかかった時間については、石田穰二氏に、次のような指摘がある。

更級日記によるに二泊の旅が普通のように、早朝京を発ち、鰐野の池の辺の下衆の小家に一泊、山の辺の寺に一泊、夜、寺に着いている。

（石田穰二『新版 枕草子』下巻 角川書店 二〇〇六・九四頁）

すなわち、清女が「九月二十日」に京から出発したとすれば、『小右記』に載った記事は年次さえ合えば、道長と同道の記事である可能性が生じてくるのである。

では、この時期、長徳三年（九九七）頃、女房である清女と中宮定子との関係はどうだったのだろう。確認してみたい。

まず、先の道長の長谷寺詣の記事の前後、定子の動向について、岸上慎二氏の整理された所に従って示しておく。

長徳元年正月十九日 原子、東宮（のち三条院）に入内

四月十日 道隆薨（四十三歳）

長徳二年二月二十五日 定子、梅壺より職へ

三月四日 定子、職より二条北宮へ

四月二十四日 伊周・隆家配流の宣命

五月一日 定子、落飾

六月八日 定子の里第二条宮焼亡、高階明順邸へ

七月二十日

公季女、義子入内

十一月十四日

顯光女、元子入内

十二月十六日

脩子誕生（今上第一皇女、母定子）

長徳三年六月二十二日

定子、職へ遷る

長徳四年二月十一日

道兼女、尊子入内

（岸上慎二『枕草子研究（続）』笠間書院 一九八三・一〇七～一〇八頁）

右に示したように、定子の父道隆が薨去した後から、定子の置かれた状況は急速に暗転する。例えば、長徳二年（九九六）二月二十五日から長徳三年（九九七）六月二十二日までの一年四か月の間に、四回遷御している。その間の長徳二年（九九六）六月八日、里第の二条宮が火事に遭って、定子は暫く御伯父高階明順の邸に身を寄せ、後に小二条殿に移っている。一方、この期間、清女は定子と離れて自分の里にいた。このことについて、『枕草子』の中で次のように記述している。

殿などのおはしまさで後、世の中に事出で来、さわがしうなりて、宮もまゐらせたまはず、小二条殿といふ所におはしますに、何ともなくうたてありしかば、久しう里にあたり。

（一三七「殿などのおはしまさで後、世の中に事出で来」二五九～二六〇頁）

これは、森本元子氏が指摘されるように、清女の「中宮の逆境にはじめて触れた記事であり、自分も鬱々とたのしまぬことがあつて久しく里居をした由を述べている」ものといえよう。周りの同僚女房達は清女が左大臣道長の人間だという噂をしており、清女は鬱々としている。この点について、坏美奈子氏も次のように述べている。

清女がこの秋定子後宮を去った直接の原因には、道長方との件が係わると思われる。七月二十日、ついに左大

臣となった道長であつたが、同僚女房の言葉に「左ノ大殿」とあることによって清女の退出はその後、おそらく直後と考えてよいのではないだろうか。

（坏美奈子『新しい枕草子論』新典社 二〇〇四・四六頁）

坏氏が指摘したように、長徳二年（九九六）七月二十日に道長は左大臣になった。直後の時期、女房達の「左大臣側の者」という噂を避け、清女は退出したのであつた。しかしその時、萩谷朴氏は「清少納言の居所を本人から知らされていたのが、前夫則光は別として、源経房・済政等、道長方の人間であつたところに、語るに落ちた清少納言の道長方への心寄せが露顕している（第七九・一三六段）といえよう。」（新潮社『枕草子』上「解説」三七二頁）と指摘されている。『枕草子』に確認できるように、定子の職に遷御された後、清女の再出仕の時期は、長徳四年（九九八）である（二五六・二五七段）。とすれば、おそらく清女は長く自分の里に居た時期、左大臣道長に誘われて長谷寺へ参詣した可能性はあるのではないだろうか。

二 「人歌よむかし」の「人」や「歌」

前節で「九月二十日」はいつの年なのかについて考えた。ただし、「九月二十日」ということについては、この年次が、いつのことかと詮索することとは別に、「九月二十日」が歳時の風物として扱われる記事が、『枕草子』以外に見えることにも留意が必要である。

例えば、『枕草子』成立後の『和泉式部日記』十六段の「有明の月の手習文」にも、「九月二十日あまり」の記事が見える。

九月二十日あまりばかりの有明の月に、御目さまして、「いみじう久しうもなりにけるかな。あはれ、この月
は見るらんかし。人やあるらん」とおぼせど、例の、童ばかりを御供にておはしまして、門をたたかせ給ふに、
女、目をさまして、よろづ思ひつづけ臥したるほどなりけり。

（近藤みゆき『和泉式部日記』角川書店 二〇〇三・四二頁）

宮が有明の月を眺めて、久しぶり逢わなかった人を思い出して感動していた場面である。『枕草子』に記された
九月二十日ことは、『和泉式部日記』に見えるように「有明の月」の時季であつたろう。同様場面は『徒然草』三
二段の「九月二十日の頃」にもみえる。

九月廿日のころ、ある人にさそはれたてまつりて、明くるまで月見ありくこと侍りしに、おほしいづる所あり
て、案内せさせて入り給ひぬ。荒れたる庭の露しげきに、わざとならぬ匂ひ、しめやかにうちかをりて、しの
びたるけはひ、いとものはれなり。

よきほどにて出で給ひぬれど、なほ事さまの優におぼえて、物のかくれよりしばし見ゐたるに、妻戸をいま少
しおしあけて、月見るけしきなり。やがてかけこもらましかば、口をしからまし。あとまで見る人ありとは、
いかでか知らん。かやうの事は、ただ朝夕の心づかひによるべし。その人、ほどなく失せにけりと聞き侍りし。

（木藤才蔵『徒然草』新潮社 一九八三・五三頁）

九月二十日の頃、作者はある貴人に誘われて、あちらこちらで有明の月を眺め、その風情を記している。前掲の
『和泉式部日記』に見られる場面と同じように、「九月二十日」は「有明の月」の時季であるが、さらに注意した
いのは、『徒然草』「九月二十日」という性格、記事、場面が、『枕草子』の本段を踏まえている可能性が高いこと
である。

『和泉式部日記』では、宮は有明の月に感動され、思い人も同じような月をみて感動するのではないかと自ら思い、次のような歌を詠まれている。

秋の夜の有明の月の入るまでにやすらひかねて帰りにしかな

（前書『和泉式部日記』同・四三頁）

有明の月を眺めながら宮は、あの人が月に入る前に来るのかなという心緒を表しているのである。

では、『枕草子』本段に書かれた「人歌よむかし」の「歌」はどうだろう。

清少納言は、平安京を離れて遠くの田舎に宿泊し、「いとくるしくて」、深夜、一人目が覚め、窓から洩りこむ月光が皆の衣の上に映された情景に感動した。こういう風情のある時に、「人歌よむかし」と清女は記した。清女が念頭に浮かべた「人」とはどういう人だろうか。清女のこの場での歌が残されているのかということを考えてみたい。まず、清女の歌を読む力量を確認してみよう。中世の『無名草子』の中に清少納言の歌詠みの評が次のように残されている。

歌詠みの方こそ、元輔が女にて、さばかりなりけるほどよりは、すぐれざりけるとかやとおぼゆる。『後拾遺』などにも、むげに少く入りて侍るめり。みづからも思ひ知りて、申し請ひて、さやうのことにはまじり侍らざりけるにや。さらでは、いといみじかりけるものにこそあめれ。⁽⁶⁾

清少納言が有名な歌人、元輔の娘にしては、『後拾遺集』に収録された和歌が少ないという。確かに『後拾遺集』における和泉式部と赤染衛門の入集数六十八首、三十二首に比べると、紫式部の入集数三首、清女の歌数は二首と少ないが、勅撰集に入集したことからみると、清女の歌の評価は、そう卑下されたものではなかったと考えてよいだろう。では、本段に記した「歌」は清女本人の歌であろうか。この点については、森本茂氏は、

この段の末尾の「さやうなるをりぞ、人歌よむかし」の文は、「私みずからは歌がよめないのだが」という含みを持つているとみられる。清原深養父の後裔、元輔の娘であつた清少納言が、こういう情景のもとで歌がよめないはずはないと、いちおう疑つてみたくなるが、しかし、これは案外彼女の本心から出たことばのように思われる。

（森本茂「枕草子鑑賞」『枕草子講座』3有精堂 一九七五・一八〇頁）

と指摘されている。清女は本心からこの場で歌を詠みたかつたと考えられましょう。しかし、何をさすのか不明とあるように、清女のこの場での歌は残されていない。この点に関する指摘は、『枕草子』の諸注釈にも次のように見られる。

①自分は歌ができないがといふ気持がある。

（田中重太郎『枕冊子』日本古典全書・朝日新聞社一 九六八・三二五頁）

②歌の場を語つて歌を記していない。

（松尾聰・永井和子『枕草子』新編日本古典文学全集・小学館二〇〇二・三五〇頁）

③既に長徳四年五月頃には、中宮から詠歌御免の仰せをこうむつていたとはいひながら（第九十四段）、まるで他人事のように評論して、清少納言自身、ここで和歌を残していないことが面白い。『清少納言集』にも相当する歌はない。

（萩谷朴『枕草子』下 新潮日本古典集成・新潮社 二〇〇五・一二四頁）

①から③までの指摘は、ほぼ同じように、この場での、清女の歌は残されていなかったというものである。要するに、相応しい「歌」は残せなかつたのである。ただし、本段の「月の窓より洩り」という描写を考えてみると、

この場での「人歌よむかし」の「人」や「歌」は、必ずしも清女本人の歌を指すとは言えない。なぜなら、歌語として、一般的でない「窓」という文字が現れているからである。

三 仮名文字における「窓」

では、和文の世界における「窓」の使われ方は、実際の所どうだろう。確認してみよう。

まず、『万葉集』には「窓」が二例。

- ① 「二六八七」 窓超尔 月臨照而 足檜乃 下風吹夜者 公乎之其念
まどごしに つきおしてりて あしひきの あらしふくよは きみをしぞおもふ
- ② 「二七四〇」 牛窓之 浪乃塩左猪 嶋響 所依之君尔 不相鴨将有
うしまどの なみのしほさぬ しまとよみ よそりしきみは あはずかもあらむ

〔新編国歌大観〕①一〇一頁②一〇二頁

①と②は和（かな）の世界に「窓」の用例である。平安時代勅撰集の『古今集』、『後撰集』、『拾遺集』及び私撰集には「窓」は見当たらない。よって『万葉集』から平安まで和歌には窓は定着していないようである。

平安以後の歌の世界における「窓」の使用状況について、本間洋一氏は次のように述べている。

おしなべて窓・月・風で表現される世界は、潘岳の亡妻を悼む「皎々 窓中月、照我室南端、清商応秋至」（悼亡詩）や「秋風入窓裏、羅帳起飄颻。仰頭看明月、寄情千里光。」（近代呉歌・秋歌）などの漢詩（玉台新詠集）世界の表現に由来するかと思われ、背後に孤独（孤閨）の心情を揺曳させていることが多い。また、「恋しく

は夢にも人を見るべきを窓打つ雨に目をさましつづ」(後拾遺集・雑三・一〇一五・高遠)は、上陽宮に幽閉された宮女の侘しくもやるせない心情を託した一節「蕭々 暗雨打窓声」(白居易・上陽白髮人)を句題に詠まれたものである。この句は『和漢朗詠集』(秋夜・二三三)にも所収され、以後「思ひ出でぬことこそなけれつれづれと窓打つ雨をきき明かしつづ」(清輔集・三五九)、「秋の夜のしづかに暗き窓の雨打ちなげかれてひましらむらん」(式子内親王集・一四五)、「明かしかね窓暗き夜の雨の音に寢覚めの心いくしほれしつ」(玉葉集・雑二・二二七一・永福門院)など、この趣向に倣う作は枚挙にいとまなく、その浸透ぶりが窺えよう。

(久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』角川書店 一九九八・八一頁)

本間氏が述べたように、歌の世界における漢字で書かれた「窓」(窗・窓・牖)は、やはり漢の世界と深く繋がるようである。

仮名日記はどうだろうか。

『土佐日記』、『蜻蛉日記』、『紫式部日記』、『更級日記』には、いずれも、「窓」が見えない。『和泉式部日記』八段「窓打つ雨」の「窓」が一例である。

五月五日になりぬ。雨なほやまず。ひと日の御返りの、つねよりももの思ひたるさまなりしを、あはれとおぼし出でて、いたう降り明かしたるつとめて、(宮)「今宵の雨の音は、おどろおどろしかりつるを」などのたまはせられたれば、(女)「夜もすがらなにごとをかは思ひつる窓打つ雨の音を聞きつつかげに居ながら、あやしきまでなん」と聞こえさせられたれば、

(近藤みゆき『和泉式部日記』角川文庫 二〇〇三・一二一―一二三頁)

この「窓打つ雨の音」は、『和漢朗詠集』卷上「秋夜」に見える『白氏文集』卷三「上陽白髮人」の句をふまえる。

物語はどうであらうか。例えば、『竹取物語』、『伊勢物語』、『大和物語』、『篁物語』には「窓」は見えないが、『宇津保物語』に二例ある。（本文は新編日本古典文学全集に拠る。）

①夏は螢を涼しき袋に多く入れて、書の上に置いてまどろまず、まいて日など白くなれば、窓に向かひて光の見ゆる限り読み、冬は雪をまろがして、そが光に当てて眼のうぐるまで学問をし、

〔祭の使〕四八七頁

②七歳にて入学して、今年は三十一年、それよりいく眼の抜け、臓の尽きむを期に定めて、大学の窓に光はがらなる朝は、眼も交はさずまぼる、光を閉ぢつる夕べは、叢の螢を集め、冬は雪を集へて、部屋に集へたること年重なりぬ。

〔祭の使〕四九五頁

これらは平安時代に流行した『蒙求』による「車胤聚螢」と「孫康映雪」の著名な故事を念頭に置く表現になっている点が注目される。

『源氏物語』には「窓」は七例。これにも同様に漢故事を踏まえた措辞が見られる。（本文は新編日本古典文学全集に拠る。）

①親など立ち添ひもてあがめて、生ひ先籠れる窓の内なるほどは、ただ片かどを聞きつたへて心を動かすこともあめり。

頭注…「養ハレテ深閑ニ在リ人未ダ識ラズ」（長恨歌）。「籠れる」は前後の語を掛詞のように結んでいる。

〔帯木〕五七頁

②ただありけむかぎりをこそ」とのたまへど、中納言は人にも見せで、わりなき窓をあけて描かせたまひけるを、

院にもかかること聞かせたまひて、梅壺に御絵ども奉らせたまへり。

頭注…無理に部屋を用意して秘密裡に製作。源氏とは対照的。「深窓、秘蔵心也」

(河海抄)。

(「絵合」三八三頁)

③かかる高き家に生まれたまひて、世界の榮華にのみ戯れたまふべき御身もちて、窓の螢を睦ひ、枝の雪を馴らしたまふ志のすぐれたるよしを、

頭注…いわゆる螢雪の功を積むこと。「窓の螢」は『晋書』や『蒙求』にみえる車胤の故事。「枝の雪」は、『孫氏世録』にみえる孫康の故事。

(「少女」二六～二七頁)

④なほなほしき際をだに、窓の内なるほどは、ほどに従ひて、ゆかしく思ふべかめるわざなれば、この家のおぼえ、内々のくだくだしきほどよりは、いと世に過ぎて、ことごとしくなむ言ひ思ひなすべかめる。

頭注…(前略) 長恨歌による。

(「常夏」二二七頁)

⑤おのづから、ともかくものの隙をうかがひつくるやうもあれ、など思ひやる方なく、深き窓の内に、何ばかりのことにつけてか、かく深き心ありけりとだに知らせたてまつるべきと胸いたういふせければ、小侍従が例の文やりたまふ。

頭注…「深き窓の内」↓帚木五七七ページ注一九。付録五七〇ページ。

「五七〇頁」…「深き窓の内に」は、1付録四二三ページ、長恨歌第四句。帚木一五七ページ注一九。ここの物

語本文は通行本の「深閨」ではなく「深窓」とある『白氏文集』によっていることとなるが、諸伝本のうち古本に属する金沢文庫系統本も同じく「深窓」である。

〔若菜〕上・一四七―一四八頁

⑥ 高きまじらひにつけても心乱れ、人に争ふ思ひの絶えぬもやすげなきを、親の窓の内ながら過ぐしたまへるやうなる心やすきことはなし。

頭注…「源の子のやうにして紫をとりたて給へば也」（岷江入楚）付録五七三頁。《親の窓の内ながら過ぐしたまへるやうなる心やすきことはなし》「長恨歌」による。

〔若菜〕下・二〇六―二〇七頁

⑦ おどろおどろしう降り来る雨に添ひて、さと吹く風に灯籠も吹きまどはして、空暗き心地するに、「窓をうつ声」など、めづらしからぬ古言をうち誦じたまへるも、をりからにや、妹が垣根におどなはせまほしき御声なり。

頭注…「秋ノ夜長シ 夜長クシテ眠ルコト無ケレバ天モ明ケズ 耿々こうこうタル残シノ灯ノ壁ニ背ケタル影、蕭々タル暗キ雨ノ窓ヲ打ツ声」（白氏文集・卷三・上陽白髮人、和漢朗詠集・秋夜）

〔幻〕五三九頁

『源氏物語』における①②④⑤⑥は『白氏文集』「長恨歌」の句を踏まえた「窓」である。③は『蒙求』の「車胤聚螢」、「孫康映雪」の故事による。⑦は『白氏文集』「上陽白髮人」による「窓打つ雨」であろう。

参考までに、『枕草子』以後の作品を取り上げてみよう。例えば、『浜松中納言物語』には「窓」が見えないが、『狭衣物語』のうちに「窓」は二例ある。（本文は新編日本古典文学全集に拠る。）

①野分だちて、風いと荒らかに、窓打つ雨もの恐ろしう聞こゆる宵の紛れに、例の忍びておはしたり。いつもなよなよとやつれなしたまへるに、いとど雨にさへいたうそぼちて、隠れなき御匂ひばかりは、ところせきまでくゆり満ちたるを、隣々には、あやしがるもをかしかりけり。

頭注…「蕭蕭タル暗キ雨ノ窓ヲ打ツ声」（白氏文集・三・上陽白髮人、和漢朗詠集・秋・秋夜）による。

〔卷一〕一二二頁

②上達部、殿上人参りつつ、朝夕に居替る講師どもの、選りすぐらせたまへる、各々年ごろ心を尽くしける、窓の内の学問の本見ゆべき度なれば、心尽したるしるしありて、尊くめでたきにも、おもしろき所多かり。

頭注…「窓の内」は深窓の意。自家で大切に培われ伝えられた学問の意か。大系は、「窓前看古書、燈下尋書義」

（古文真宝前集。勸学文王安石）を引く。

〔卷三〕一七一～一七二頁

これらの①と②の「窓」の用例も、漢故事と密接に関わる表現と考えられる。

以上まとめると、仮名文学にける「窓」の用例の、多くは『蒙求』の故事「車胤聚螢」「孫康映雪」や「白氏文集」の「長恨歌」や「上陽白髮人」の秀句を踏まえたものであった。

こうした状況を観察した上で、『枕草子』において一箇所に使われる本段の「月の窓より洩り」における「窓」はどう考えればよいのだろうか。確認のため、先行の諸注を参考してみよう。

増田繁夫氏は「ここは、排煙や採光のために、屋根の部分にかけられたもの。当時の建物には現代という窓はまだない。（増田繁夫『枕草子』和泉書院 二〇〇一・一八〇頁）」と指摘している。石田穰二氏は「漢詩から来た言い方。」（石田穰二『新版 枕草子』下巻 角川書店 一九九九・九四頁）と述べている。

また、鈴木日出男氏も「和文中には例の少ない用語で、漢詩文の影響がうかがえる」（鈴木日出男『枕草子』下巻）出版 一九八七・二〇一頁）と漢籍から導かれた視点であることをほのめかしている。

では、詩の世界において「窓」はどのように用いられているのか。確認してみよう。

四 「詩」の世界における「窓」

ここでは日本の詩文集を中心に、奈良時代から平安時期までの代表的な作品集を確認してみたい。

まず、奈良時代の『懷風藻』には「窓」が一箇所ある。作者山田史三方の詩、「五言 秋日於長王宅宴新羅客」の序の中で「窓」を用いた例である。

五言。秋日長王が宅にして新羅の客を宴す。一首。并せて序。

（前略）

清談振発。忘貴賤於窓雞。

清談振発して、貴賤を窓雞に忘る。

歌台落塵。郢曲與巴音雜響。歌台塵を落して、郢曲と巴音と響を雜へ。

（後略）

（『懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹』日本古典文学大系 一九八八・二一六～二一七頁）

傍線を付した「窓雞」という表現は『幽明録』が指摘される。^⑦ 晋の袁州刺史、沛国宋処宗は、嘗て一つ良く啼く鶏を買った。大事に養って恒籠の中に入れて窓に付けていたという。

次に、平安初期の勅撰三集、『凌雲集』、『文華秀麗集』、『経国集』を確認してみよう。

『凌雲集』には「窓」が一例。坂上今継の「詠史」の句の「遥望南岳徑 高嘯北窓隈」である。この「窓」は、「詠史」の内容に見えるように陶淵明の「帰園田居」（園田の居に帰る）「種豆南山下 草盛豆苗稀」（豆を種う南山の下 草盛んにして豆苗稀なり）からの発想と考えられる。

『文華秀麗集』の中で「窓」は十一例。そのうち「窓」をよく使った詩人巨勢識人の作品を確認してみよう。

①和伴姫秋夜閨情。
一首。 巨勢識人

伴姫が「秋夜の閨情」に和す

一首。 巨勢識人

（前略）

真珠暗箔秋風閉。

真珠の暗箔秋風閉ぢ、

楊柳疎窓夜月寒。

楊柳の疎窓夜月寒し。

不計別怨経歳序。

計らざりき別怨歳序を経むとは、

唯知曉鏡玉顔残。

唯知るは曉鏡玉顔の残はるのみ。

（『懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹』日本古典文学大系 二四七頁）

②春日侍神泉苑。賦得春月

春日神泉苑に侍り。賦して「春月」を得たり。

応製。一首。巨勢識人

応製。一首。 巨勢識人

春天霽静無纖翳。

春天霽静纖翳も無く、

皎潔孤明桂月来。

皎潔孤明桂月来たる。

窓外曲鉤疑卷箔。

窓外の曲鉤箔を卷かむかと疑ひ、

空中懸鏡不関台。

空中の懸鏡台に関れず。

(後略)

〔懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹〕日本古典文学大系 一九八八・二九九頁)

①題名の如く、巨勢識人が姫大伴氏という女性詩人の「晚秋述懷」に依えて作った作品である。この詩句は秋の夜で、窓外の月の寒さの感じを表している。②は巨勢識人が「春月」題にして作った詩である。窓の外の三日月の描写と考えられる。

『経国集』では「窓」が八例、「牖」は三例。「窓」と「月」の文字を用いた例を確認してみよう。太上天皇在祚「五言和藤朝臣春日過前尚書秋公帰病之作一首」(藤朝臣が「春日に前尚書秋公の帰病を過ふ作」に和す 一首)には「夜来琴酒意 松月暁窓虚」(夜来琴酒の意あり 松月暁窓虚し)とある。後句「松月暁窓虚」は、孟浩然の「歲暮帰南山」の終句「永懷愁不寐 松月夜窓虚」と一致することは先行の研究で指摘⁽⁸⁾されている。

『菅家文草・菅家後集』の「窓」は二十三例。「窓下」は五例、「窓頭」は四例、「窓中」は二例である。「窓」と「月」の文字を用いた句は四例。そのうち「暁月」を掲げてみよう。

暁月

暁の月

客舍陰蒙四面山

客舍陰り蒙る四面の山

窓中待月甚幽閑

窓の中にして月を待つ甚だ幽閑なり

遠鷄一報廻頭望

遠鷄一たび報じて頭を廻して望めば

插著寒雲半缺環

寒雲に插著す半缺くる環

〔菅家文草・菅家後集〕日本古典文学大系 一九八八・三五二頁)

右の詩の第二句の「窓中待月甚幽閑」の典拠とされる表現は、先行の研究に拠ると、白居易の「老来生計詩」「林

下の幽閑気味深し」と考えられる。

ほかの漢詩集はどうだろう。例えば、『扶桑集』、江相公の「重以吟贈」の「窓螢役了辞応退」の「窓螢」は、『蒙求』の車胤の故事を念頭に置くもの。『本朝無題詩』釈蓮禪「賦雪」の「孫氏寒窓如燭映」の詩句も、『蒙求』の「孫康映雪」の故事による。『江吏部集』にも「窓」が見える。それは「巻中」「釈教部」「奉和前源遠州刺史水心寺詩」の、第三句「詩酒故窓花自散」とあるが、ここは故事とは無縁の表現であろう。

『枕草子』よりやや後に編集された『和漢朗詠集』の秀句にも、いくつかの「窓」が見られるが、ここでは、「夜」「窓」「月」の文字が含まれる秀句を確認しておく。（本文は新編日本古典文学全集に拠る。）

① 風生竹夜窓間臥 月照松時台上行 白

風の竹に生る夜窓の間に臥せり 月の松を照ららす時台の上に行く 白。

〔巻上〕 一五一「夏夜」九二頁

② 空夜窓閑螢度後 深更軒白月明初 白

空夜に窓閑かなり螢度つて後 深更軒白し月の明らかなる初 白。

〔巻上〕 一五二「夏夜」九三頁

③ 触石春雲生枕上 銜嶺曉月出窓中 直幹

石に触るる春の雲は枕の上に生ず 嶺に銜める曉の月は窓の中より出づ 直幹。

〔巻下〕 五六二「山家」二九六頁

④ 幽思不窮 深巷無人之處 愁腸欲斷 閑窓有月之時 白

幽思窮まらず 深巷に人無き処 愁腸断えなむとす 閑窓に月の有る時上に同じ。

〔巻下〕六一五「閑居」三三二頁

⑤晦跡未抛苔径月 避喧猶臥竹窓風 佐幹

跡を晦ましては未だ苔径の月を抛たず 喧を避けては猶ほ竹窓の風に臥せり佐幹。

〔巻下〕六二一「閑居」三三四頁

⑥花月一窓交昔昵 雲泥万里眼今窮 正通

花月一窓交り昔昵じかりき 雲泥万里眼今窮まんぬ 正通。

〔巻下〕七七〇「慶賀」四〇一頁

これらのうち①②は『白氏文集』に拠る秀句であり、いずれも「夏夜」の風景である。又④も白楽天の秀句であるが、これは「閑窓」に月の有る時に、眺める人は思慕を生じ来るのであるという。③は春の暁月が山の上に出る風景である。⑤は「窓外」の風景と考えられる。⑥は「雲」のような「窓外」の月光と花影の重なる風情を表しているものである。

では、平安の漢詩人の表現の基層をなした典籍とされる『白氏文集』『文選』における「窓」はどうだろう。

『白氏文集』には、前掲の『和漢朗詠集』に収録された佳句以外、「窓」は百三十一例、それぞれ主な「東窓」「南窓」「西窓」「北窓」「隔窓」「傍窓」「臨窓」「点窓」「拂窓」「打窓」「送窓」「透窓」「涼窓」「紅窓」「緑窓」「竹窓」「松窓」「小窓」「夜窓」「紗窓」「軒窓」「経窓」「滅窓」「春窓」「闇窓」「陰窓」「水窓」「満窓」というような表現が使われている。

『文選』には「窓」が十例。たとえば、第二十三卷「哀傷」、潘安仁の「悼亡詩」中の第二首である。全詩は長く、二八句があり、最初の第一、二句を確認してみよう。「皎皎窓中月 照我室南端」(皎皎たる窓中の月 我が室の南

端を照らす）。この作品については、既に掲げた本間洋一氏が解釈されているように、詩の世界で「窓」と「月」の典型的な用例である。

これら古代から平安朝にかけての代表和文学、漢詩文における「窓」の用例を挙げて見た結果、「窓」は漢籍との密接な関係があると考えられる。

五 「窓」から射し込む「月光」

ここまで述べてきたように、歌語として「窓」は定着していなかったようであり、漢語的に仮名文学に使用されているようである。したがって、『枕草子』本段の「月の窓より洩り」の風景からは、まず、漢詩・漢文の世界が想起されたのではないかということを想定するのが自然だろう。

では、窓から射し込む月光に対する詩作を確認してみたい。

詩の世界に見られる最も早い明月の例は、『古詩十九首』の中の「其十九」の作者不明の「明月何皎皎」（明月何ぞ皎皎たる）であろう。この秀句に倣う作は多い。例えば、『文選』卷三十、陸士衡の「擬古詩十二首」のうち「擬明月何皎皎」（「明月何ぞ皎皎たる」に擬す）の例がある。

擬明月何皎皎（「明月何ぞ皎皎たる」に擬す）

安寝北堂上 安らかに北堂の上に寝ぬれば

明月入我牖 明月 我が牖に入れり

（後略）

作者は故郷を離れて、深夜の寢室に入つて月光に感動された心情を表す作品である。

このような風流は、『白氏文集』「卷二十二」「銘・賛・箴・謡・偈」「素屏謡」にも見える。

(前略)

吾於香鑪峯下置草堂、 吾香鑪峯の下に於いて草堂を置き、

二屏倚在東西牆。 二屏 倚せて東西の牆に在り。

夜如明月入我室、 夜は明月の我が室に入るが如く、

暁如白雲圍我牀。 暁は白雲の我が牀を圍むが如し。

(後略)

(岡村繁『白氏文集』五 明治書院 二〇〇四・二九頁)

注目したいのは、白氏の「素屏謡」の中に書かれた月は実物ではない。作者が創造した明月が「我が室」に入つた風景である。

詩の世界で最も多く明月を詠んだ詩人は李白であろう。興膳宏氏の論文によれば、月の出てくる詩は三百首をこえる。四百箇所あまりで月が書かれているという。(『月明の中の李白』『中国文学報』第四十四冊) ここでは、李白に書かれた明月が寢室に射し込む詩を掲げたい。それは『楽府詩集』に収録された「静夜思」である。

李白 静夜思

静夜の思

牀前看月光。

牀前に月光を見る、

疑是地上霜。

疑ふらくは、是れ地上の霜。

舉頭望山月。

頭を挙げて山月を望み、

低頭思故郷。

頭を低れて故郷を思ふ。

(久保天隨『李白全詩集』日本図書センター 一九九〇・五七六頁)

開元十五年(七二七年)、二十七歳の李白は安陸(湖北省)を訪れ、西北部にある寿山に隠れ住んだ。この詩はその年の秋、或る夜ふけに月を見ながら故郷の思いを詠んだものである。⁽⁹⁾

題名「静夜思」のように、深夜、窓から射し込む月光は、白く霜のように寝台の直前に現れている。詩人は頭を挙げて山月を望み、頭を低れて故郷を思うという名作である。「唐詩選」に採られて、日本人には、あまりにもよく知られている詩ではあるが、平安時代における李白の詩作の享受は必ずしも盛んとは言い難く、当時であって、周知の詩であつたという保証はない。しかし、藤原佐世(八四七〜八九七)撰、八九〇年ごろ成立の『日本国見在書目録』には「李白歌行」⁽¹⁰⁾が見え、『千載佳句』にも次に示すように李白の二首の佳句が見られる。

①玉階一夜留明月 金殿三春滿落花

②三山半落青天外 二水中分白鷺洲⁽¹¹⁾

その例をもつて考えれば、平安時代に李白の作品を読まれた可能性はあるだろう。

以上、いくつかの窓から射しこむ月光に対する漢詩をあげてきた。『枕草子』本段において「月の窓より洩り」の「窓」は漢文学の世界を想起しつづものと記されている。そして、深夜の寢室に白い月光の風情に対して「人歌よむかし」と「歌」が使われているものの、ここでは、おそらく相応しい漢詩を思い出し、男性ならば思いきり漢詩の秀句を口ずさむか朗詠することであろうが、女性である清女は、やはり「歌」を詠みたかったのだろう。

『枕草子』には月に対する漢詩を朗詠した場面がいくつか確認できる。

①「左衛門の陣にまかり見む」とて行けば、我も我もと問ひつぎて行くに、殿上人あま

た声して、「なにがし「声秋」と誦してまゐる音すれば、逃げ入り、物など言ふ。「月を見たまひけり」などめでて歌よむもあり。

(七四「職の御曹司におはしますころ」一二三―一二三二頁)

②果てて、酒飲み、詩誦などするに、頭中将齊信の君の、「月秋と期して身いづくか」といふ事をうち出だしたまへりし、はたいみじうめでたし。

(一二九「故殿の御ために、月ごとの十日」二四二頁)

③五月ばかり、月もなういと暗きに、(中略)まめごとなども言ひ合はせてゐたまへるに、「裁あてこの君の称す」と誦して、またあつまり来たれば、「殿上にて言ひ期しつる本意もなくては、など帰れたあひぬるぞとあやしうこそありつれ」とのたまへば、「さる事には、何のいらへをかせむ。(後略)

(一二三「五月ばかり、月もなういと暗きに」二四七―二四八頁)

④大路近なる所にて聞けば、車に乗りたる人の、有明のをかしきに簾あげて「遊子なほ残りの月に行く」という詩を、声よくて誦したるをかし。

(一八五「大路近なる所にて聞けば」三三三頁)

⑤十二月二十四日、宮の御仏名の半夜の導師聞きて出づる人は、夜中ばかりも過ぎにけむかし。(中略)月の影のはしたなさに、うしろざまにすべり入るを、常に引き寄せ、あらはになされてわぶるもをかし。「凜々として氷鋪けり」といふことを、かへすがへす誦しておはするは、いみじうをかしうて、夜一夜もありかまほしきに、行く所の近うなるも、くちをし。

(二八三)「十二月二十四日、宮の御仏名の」四三七～四三八頁)

これらの①～⑤は主な月を主題として朗詠した場面である。季節によって様々な形の月を朗詠している。例えば、①②は秋の月、③は五月の月、④は有明の月、⑤は冬の月。全て漢詩の秀句を朗詠したものである。これらの朗詠された秀句はいずれも『和漢朗詠集』に採られたものである。例えば、①は「卷上・夏」源英明「納涼」であり、②は「卷下」菅三品「懷旧」であり、③は「卷下」藤原篤茂「竹」であり、④は「卷下」賈嵩「暁」であり、⑤は「卷上・秋」公乘億「十五夜」である。

男性は漢文学(真名)、女性は仮名文学(かな)という平安貴族の教養からみると、女性である清少納言は詩的世界を想いながら歌を詠もうとしたと考える方が相応しいであろう。

おわりに

以上、三卷本『枕草子』にしか見えない「九月二十日あまりのほど」章段について、3つの問題点を考えた。一つは、文頭「九月二十日」の年時について、『小右記』長徳三年(九九七)、清少納言は中宮定子から離れて、自分の里にいる時期に、左大臣道長に誘われて長谷寺に参詣した可能性を提言した。

もう一つは、「月の窓より洩り」の「窓」について、歌語としての「窓」は、『万葉集』から平安朝まで定着していなかったようである。仮名文学における「窓」を考察してみると、多くの場合は漢の故事及び漢詩の秀句が使われているのである。

最後に「人歌よむかし」の「人」や「歌」は必ずしも清女本人の歌を指すとは言えないのである。この場で、清

女は深夜の窓から射し込む月光に感動して、その時に歌を詠みたかったのである。これは清女の本音とも考えられるが、窓があるから考えて、同じような情景の相応しい漢詩を思い出し、男性ならば大きく声を出して、漢詩の秀句を朗詠するべきであろうが、女性である清女はやはり「歌」に表現したわけであろう。

『枕草子』本段に現れた「人歌よむかし」や「月の窓より洩り」を合わせてみると、これらの表現は、典型的な「和」と「漢」を融合したものと考えられる。これはおそらく作者清少納言の深く漢文学の知識を氷山の一角に露呈したものであろう。『枕草子』における漢文学の背景を理解すれば、新たな読みの可能性が広がるであろう。

〔注〕

- (1) 三卷本・松尾聰・永井和子『枕草子』新編日本古典文学全集（小学館 二〇〇二）。能因本、松尾聰・永井和子『枕草子』日本古典文学全集（小学館 一九七九）。前田本、田中重太郎『枕冊子新註（前田家本）』（古典文庫 一九七二）。堺本、速水博司『堺本枕草子評釈——本文・校異・評釈・現代語訳・語彙索引——』（有朋堂 一九九〇）。

- (2) 加藤盤斎『清少納言枕草紙抄』、北村季吟『枕草子春曙抄』、岡西惟中『枕草子旁註』の中では、いずれも本章段はなし。明治以後、平成までの代表的な三巻本注釈書を見ると、池田亀鑑・岸上慎二『枕草子』（日本古典文学大系）、渡辺実『枕草子』（新日本古典文学大系）、松尾聰・永井和子『枕草子』（新編日本古典文学全集）、萩谷朴『枕草子』上・下（新潮日本古典集成）、石田穰二『枕草子』上・下（角川ソフィア文庫）には、本章段「九月二十日」に対して、何年の九月二十日なのかについて触れていない。

- (3) 岸上慎二『枕草子』と中関白家』『撰関時代史の研究』（吉川弘文館 一九六五・三五〇頁）と萩谷朴『枕

草子解環」四（同朋舎 一九八三・三四〇頁）を参照。

- (4) 『増補史料大成 小右記』一別巻（臨川書店 一九九八）一三六～一三七頁。『小右記』の記事は、大日本史料第二編之三、次のようにある。「二十日、壬午、左大臣道長、長谷寺ニ詣ツ」。これらの記録は『枕草子大事典』『枕草子総合年表』の「主要事項」の中にも、次のように書かれている。「九月20 道長長谷寺に参詣。「一上布衣城外の例、抑訪ぬるに前古聞かざる所なり、事々輕忽」（小右記）『枕草子大事典』（勉誠出版二〇〇二）一〇九五～一〇九六頁。但し、『枕草子記事』には空白である。書き下し文は、『訓読小右記』（古日記輪読会）に拠る。

- (5) 森本元子『古典文学論考』『枕草子和歌日記』（新典社 一九八九）二二五頁。

- (6) 桑原博史『無名草子』（新潮社 一九七六）一〇九～一一〇頁。

- (7) 窓鶏 芸文類聚（鳥部）に「幽明錄曰、晉袁（えん）州刺史沛国宋処宗、嘗買得一長鳴雞、愛養甚至、恒籠着窓間、雞遂作人語、与処宗談論、極有玄致、終日不綴、処宗因此功業大進」（小島憲之『懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹』日本古典文学大系・懷風藻補注52）四五九頁。

- (8) 小島憲之『国風暗黒時代の文学』下I——弘仁・天長期の文学を中心として——（塙書房一九九二）三〇八六頁。

- (9) 宇野直人『NHK古典講読漢詩 李白』（日本放送出版協会 二〇〇七）六四頁。

- (10) 矢島玄亮『日本国見在書目録——集証と研究——』（汲古書院 一九八七）「李白歌行集三」巻」○李白的歌行詩を邦人の収録したものか。二二五頁。

- (11) 後藤昭雄・金原理『新撰万葉集・千載佳句』（在九州国文資料影印叢書刊行会 一九七九）による。①は五

六頁であり、②は五八頁である。

- (12) 『枕草子』における漢文学の受容について、昭和から代表的な論文及び単行本を、次のようにある。田中重太郎氏「枕冊子に投影した海外文学」『国文学』(一九六二)。大曾根章介氏「『枕草子』と漢文学」『国文学』(一九六七)。塩田良平氏『諸説一覽 枕草子』[木越隆「出典・源泉・先縦」](明治書院 一九七〇)。川口久雄氏「唐代民間文学と枕草子の形成」(『平安朝日本漢文学史の研究』下巻(明治書院一九八二)。松田豊子氏「清女表現と漢籍典拠——出典語の形象性——」『清少納言の獨創表現』(風間書房 一九八三)。相田満氏「『枕草子』漢故事考——『蒙求』故事とのかかわりを通して——」『東洋文化』(無窮会 一九九五)。古瀬雅義氏「『枕草子』「憚りなし」の指示する『論語』基本軸」『論考平安王朝の文学』(新典社 一九九八)。矢作武氏「枕草子と漢籍」『枕草子大事典』(勉誠出版 二〇〇二)。坪美奈子氏「枕草子の本文——典拠引用における能因本と三卷本の表現差——」『新しい枕草子論』(新典社 二〇〇四)。李暁梅氏『枕草子と漢籍』(溪水社 二〇〇八)。